

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000118		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム ピオニー		
所在地	栃木県大田原市山の手2-13-31		
自己評価作成日	平成24年10月29日	評価結果市町村受理日	平成25年3月15日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成24年11月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「ゆっくり、いっしょに、楽しみながら」を事業所理念とし、入居者一人ひとりのペースを大切にしながら楽しみを持って共同生活を送れるような支援を心掛けています。
季節の行事を通して時候の移り変わりを感じていただけるような外出支援や、事業所の秋祭り「湘風祭」、地区の文化祭への作品出展等を通して、地域との関係作りにも力を入れています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

料亭を改修して造られた小規模多機能型居宅介護事業所併設のグループホームは、商店や住宅が建ち並ぶ古くからの町並みの中にある。広い駐車場や花や実のなる木のある中庭は入居者の散歩や季節を感じる憩いの場になっている。運営推進会議で地域住民代表から公民館の文化祭への出展を勧められ、参加することで旧知の方と会って話したり、地域の方と顔見知りになる機会になっている。また、消防訓練に協力したいという申し出もあった。ホームの秋祭り「湘風祭」のチラシを近隣へ配布したのをきっかけに来訪された方、ホームの名である「みずばし」の木彫を下さった方もいるなど、地域と良い関係作りをしている。ケアマネジャーは日頃より家族とこまめに連絡をとり信頼関係を築いている。職員の半数以上が平成20年開設当初からの勤続で、入居者中心の考え方がしっかりしていて入居者との関係作りもできており、事業所理念の理解度も高く理念が反映されたサービスが実施されている。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」を事業所理念とし、職員がそれを共有できるよう玄関前に掲示している。また、年に一度行う接遇マナーの勉強会にて、事業所理念を確認し、サービスの実践につなげている。	年度初めに行う接遇マナーの勉強会や毎月の定例会議で理念を確認している。「ゆっくり、いっしょに、楽しみながら」のもとに入居者一人ひとりその人のペースで季節を感じながら生活支援をしている。開設当初からの職員が半数以上なので、理念の理解度も上がり理念が反映されたサービスの実践につながっている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、回覧板を通して情報を得ている。地域の文化祭に参加させていただいたり、事業所の秋祭り「湘風祭」の実施、幼稚園児の訪問など地域との連携に努めている。	回覧板の情報を見て小学校の催し物に出かけたり、与一祭り見物、運営推進会議で地域代表に勧められ地域文化祭への作品展示など地域行事への参加機会も多く、旧知の人に会えたり地域の方と顔なじみになる場にもなっている。事業所を春の祭りの「山車」のトイレ休憩所として提供もしている。職員が配布した「湘風祭」のチラシを見て来訪された方、自作のみずばししょうの彫り物を下さる方いるなど地域と良い関係作りをしている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前、地域住民を対象とした「認知症サポーター講座」を開催した。また、施設をオープンにした秋祭りを開催し、地域の方々へ施設の内部や利用者の作品、認知症の方への支援を見ていただき、理解を得ている。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では 入居者数・介護度・年齢・地域 利用状況 活動実績・行事報告行っている。会議のメンバーから提言をいただき、地域の文化祭へ作品を出展したり、利用者の外出や楽しみについての意見をいただいて、サービスの向上に活かしている。また、地域住民代表の方から、消防訓練に協力していきたいとの申し出があった。	年6回併設事業所と合同で市職員、民生委員、地域住民代表、包括支援センター職員、家族が参加し開催している。家族から要望は出ないが、満足しているという言葉や畑を使って欲しいとの提案が出ている。地域文化祭の作品参加、ボランティアや利用者の外出先について提言をメンバーから頂いている。申し出があった地域消防団との訓練については具体的な方向性はまだ出ていない。	地域から申し出があった地域消防団との消防訓練を早急に具体化するとともに、運営推進会議にも参加してもらい、ホームのある2階からの避難方法についても助言をもらうなど協力関係を築いて欲しい。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の介護保険事業計画や運営推進会議、市事業所連絡協議会やケアマネ連絡協議会等を通して意見交換を行っている。	市職員には運営推進会議で助言や提言をもらい、後で運営推進会議議事録を必ず市職員に手渡ししている。市からインフルエンザやベッド巻き込み事故についての情報やアドバイスを受けるなど連携をはかっている。市事業所連絡協議会やケアマネ連絡会議等を通じて意見交換をしたり、研修会で情報得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所のマニュアルや勉強会を通して身体拘束による弊害を理解するとともに、個人尊重のケア・見守り・声掛け・寄り添いの実施により、身体拘束のない支援に努めている。	10月に身体拘束と認知症の内部研修を行い、身近な事例をもとに活発な意見交換を行って理解を深めた。昨年からホームの出入り口のドアとエレベーターの施錠をしないことにしたが、声かけ、見守り、入居者の動きを常に意識することで現在まで問題もなく継続出来ている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内研修を通して権利擁護の熟知を図るとともに、入浴の際などの日常生活の中で身体の異変に注意を払っている。		
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	有識者を招き、権利擁護に関する事業所内研修を行った。必要性が出た際に、学んだことを活用できるよう支援したい。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書を基にグループホームの役割や制度に関することを十分に説明し、入居者が新たな生活を確立するための、本人や家族の理解・納得を得たうえで契約を締結している。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	介護計画見直しに当たっては「サービス担当者会議」を開催し入居者の家族に出席していただき意見や要望の把握を行っている。また、利用料金納入時や病院受診時に来所された際も話し合いの場として活用している。	「サービス担当者会議」は家族の参加できる日の日中、入居者の様子がわかるように2階の居間で行い意見や要望を聞いている。ケアマネ、家族、順番の職員、時には本人も参加することがある。日頃よりケアマネは家族とこまめに連絡をとり信頼関係を築いているので、入居者全ての家族が参加する。意見要望はあまり出ないが、家族は入居者の様子を見て安心している。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一回の管理者ケアマネ会議、職員定例会議を通して、意見や提案を聞く機会を設けている。	職員は入居者中心の考え方がしっかりしており、密接に関わっているため、定例会議では職員から取り組みたいこと、改善したいこと等意見や提案も多く出て、浴室の手すり取り付けや外出機会等に反映されている。会議録は職員全員に配布され共有している。職員個々の年度目標を作成しているが評価や見直しなどはされていない。	職員個人の年度目標の評価、見直しがされていないので、今後職員の意識向上やスキルアップ等をどの様にするのか検討していただきたい。職員から運営推進会議に出席したいという意見も聞かれ、直接地域の方や家族と意見を交換したことが現場に活かされることは意義があるので検討を期待する。
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	各職員がやりがいを感じ、向上心を持って働けるよう、個々の能力や実績、勤務状況を考慮したうえで、環境や条件整備に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の事業所内研修の実施や、外部の研修を回覧して周知を図り参加する機会を作っている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市のサービス事業所連絡会やケアマネ連絡会を通して、同業者との交流・情報交換を行っている。また、同法人の事業所間でも交流を図っている。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用前に、本人や家族に会って聞き取りを行い、本人の状態や要望等をうかがって、状況にあった支援ができるよう努めている。職員は本人の思いを傾聴することを心掛け、良い関係作りに努めている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前や契約時に家族との面会を行い、不安や要望を聞く機会を作り、関係作りに努めている。また、入居後も家族の来訪時に現況をお知らせし、家族の意向や思いに耳を傾け、安心していただけるよう心掛けている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	インテーク時に本人・家族の思いや意向の聞き役となり、共に解決策を見い出せるよう話しやすい雰囲気作りを心掛けている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	これまでの生活の中で得意とされていた物(料理・編み物・縫物等)を教えていただくなど、人生の先輩として尊重し、話に耳を傾け、共に支え合う関係を築いていけるよう努めている。		
19		本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の来訪時に現況を報告したり、毎月の請求書と一緒に写真入りの手紙を送ることで本人の様子をお知らせしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の小規模多機能施設みずばしように知り合いが通われていて事業所間を行き来したり、みずばしよから入居された方もいるため、入居を機に近くに住む親せきや知り合いが尋ねてくることもある。また、かかりつけ医受診の継続など身近な環境で馴染みの人や場所との関係継続に努めている。	公民館の文化祭や地域の催し物会場や祭り見物で顔見知りの方に会ったり、かかりつけ医の受診や馴染みの美容院に通ったりする方もいる。今まで一緒に行動してきたシルバーサロンの方が訪問してくれたり、併設事業所の利用者とお茶のみの交流があったりと馴染みとの関係の継続に努めている。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	洗濯物の片付けや食事前後の作業が共同のものとなるよう支援したり、気の合う方同士が近くに座れるよう配慮している。同じ状況・環境の中で関わり合いの大切さを感じていただき、職員が適度に介入することで、孤立せずに交流が深まるような支援に努めている。		
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院後や退居後も、近くに行った際には訪問し様子を見に行くこともある。退居後も必要に応じて相談や支援に努めており、再入居に至ったケースもある。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の生活から、本人の表情や仕草などを観察し、興味の対象、好き嫌いや思いなどを探り、心地よさが何かを見い出すように心掛けている。	ゆっくり目を見ながら会話して入居者の表情や口調、言葉のトーンで思いや気持ちをくみ取り理解するようにしている。個人の生活歴から季節の話や歌で興味を示す事を探し、レクや外出に参加できる回数を増やしている。「手を挙げるとトイレのサイン」を職員と共有したり、大きな人形を入居者が世話すると穏やかになるなど職員が入居者の気持ちをくみ取り心地よく過ごせるように心がけている。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時には必ず、生活歴、得意だったことやこだわり、さらには住まいの間取りなどを把握して、入居後の生活に安心感をもてるよう心掛けている。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員一人ひとりが、心身の状態や有する能力等の観察に努め、細かな変化の状況も共有するよう申し送りを充実している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がその人らしく穏やかに暮らすための課題とケアのあり方について、本人・家族・職員と話し合うためのサービス担当者会議や定例会議でケアカンファレンスを行っている。そして、それぞれの思いや意見が反映されるよう介護計画を作成している。	家族の参加できる日にサービス担当者会議を家族、ケアマネ、職員、時には本人も交え居間で行っている。ケアマネは日誌、個別経過記録や申し送りノート等で入居者の日常の様子を確認し、状態変化については職員からの意見を聞き、サービス担当者会議、定例会議での意見をもとに介護計画を作成している。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別経過記録や日報、申し送りノート等によって情報が共有され、日々のケアの修正や介護計画の見直しへの蓄積となっている。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の協力を得て、デパートや美容院に出掛けたり、外食や住み慣れた自宅への立ち寄り(草むしり)などで気分転換を図っている。また、地域の祭りや展覧会、食材買出しに出掛けたり、一階の小規模多機能型介護施設みずばしょにお茶を飲み立ち寄り交流を図っている。		
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支える地域資源の把握・開拓までは至っていないが、地域のボランティア、出張理容などとの交流や、お祭り、文化祭などに参加することで、楽しみのある生活が送れるよう努めている。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの主治医に継続して診ていただいている。診察時の付き添いは基本的には家族が行っているが、看護師の資格を持つ計画作成担当者もできるだけ同行し状態を報告するなど主治医との連携を深めている。受診に同行できない場合は電話や事前に主治医と面談したりし、確実に主治医に入居者の状態が伝わるようにしている。	受診は家族が付き添っており、受診後はホームに寄って結果を伝え薬を渡している。かかりつけ医の往診も1件ある。薬の量が多く服薬が困難になったり、注射の回数が多い入居者にはケアマネが受診に同行したり、電話で医師に日常の様子や注射後の体調変化を詳しく伝え、必要最低限の処方に替えてもらうなど、入居者の体の負担を軽減する支援をしている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業者内に専従の看護師はいないが、看護師の資格を持つ介護支援専門員にアドバイスをもらって適切な支援ができるよう努めている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際しては、かかりつけ医と連携し紹介状などの入手、家族への状況説明等を行い、不安の除去に努めている。入院してからも状態把握や病院関係者との情報交換や相談のため面会し関係作りを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重症化や終末期の医療ニーズの高くなった場合の事業所として対応、どのような状態になるまで入居していただけるか、また、支援方法などについて説明し話し合っている。日頃から入居者の状態については家族にお知らせし、情報を共有して状態の悪化、医療依存度が高くなってきた場合も家族と話し合いを重ね、不安の除去に努めている。	家族とは日頃からこまめに連絡をとり入居者の状態の情報を共有している。入居者の体調の不具合が続かないよう予防をしつつ長くここで暮らして欲しいが、医療依存度が高くなってきた時点でその後の過ごし方について家族と相談したいと考えている。「看取りについて、グループホームでできること」の勉強会も行っている。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルや連絡網を常に確認できる場所に置いたり、救急救命講習を受講し、迅速な対応を心掛けている。また、救急隊に渡す利用者情報を準備している。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、地域住民も交えた防災訓練を実施し、消防署職員から指導・助言をいただいている。5月には、地震から火災発生という想定で防災訓練をおこなった。	11月には消防署員、近隣の方の立ち合いで夜間を想定した避難訓練を実施した。参加した近隣の方には避難後の入居者の見守りをお願いしている。職員間の緊急連絡網の見直しを行った。緊急時にすぐ持ち出せるように入居者の情報提供表を入れたリュックが用意してある。災害時必要な物品のリストを作り備蓄を始めた。	地域住民代表から消防訓練に参加協力したいと申し出があったが具体化していないとのことであるが、今後地域との関係作りや消防団との訓練の実現を期待する。2階からの避難という課題もあるので、年2回だけでなく回数を増やしたり地域から助言をもらうなど訓練を更に徹底して欲しい。
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の守秘義務を契約書に明記し、契約時に説明している。また、接遇マニュアルの作成や法人のプライバシー保護規定を玄関に掲示し、利用者・家族の人権やプライバシーにも配慮しながら支援に努めている。	毎年年度初めに「接遇マナー」の研修を行っている。入居者の人格を大切にその人のペースに合わせた支援を心掛けている。敬語だけでなく時にはくだけた言葉も使って利用者との関係作りに努めている。ホームページの中で利用者の写真等を使うことについては家族の了解を得ることにしている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望や思いに配慮し、出来る限り要望に沿うことや、自己表現しやすい関係を築けるよう、日々の関わりを大切にしている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活リズムに合わせてケアを行い、必要以上に手を出しすぎぬよう支援に努めている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節や気候に合わせて本人に衣類を選んでいただけるよう声掛けをしたり、爪の手入れの支援等を行い、その人らしい身だしなみやお洒落ができるよう努めている。髪の高さを見ながら、ヘアカットを勧めたりもしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日ホワイトボードにその日の食事メニューを記載し、献立や材料の説明をしている。できる方には食後の片付けやテーブル拭き、食器拭きを行っていただいたり、一緒に食材やおやつを買い物に出掛けて、好みのものを選んでいただいている。	週3回はリクエストをとってお好み献立を手作りし、週1回パン食、あとは調理済みおかずを利用しごはん、汁、おやつを手作りしている。入居者は職員と一緒に買い物に行ったり、下ごしらえや後片付けを手伝っている。食事にかかる時間もその人のペースに合わせている。食器や箸は使い慣れたものを持ってきて使ってもらっている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	既往歴を考慮しながら、個々の摂取量に配慮した盛り付けを行っている。また、水分量は1日1Lを目安に飲み物を提供している。食事量と水分量は毎日チェック表に記載している。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの残存能力に合わせて、食後のハブラシあるいは義歯洗浄の支援を行い、清潔保持に努めている。		
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	極力オムツを使用しないことを基本とし、生活パターンと残存機能に応じたトイレ誘導や排泄用品の使用に努めている。	排泄支援を職員は入居者との信頼関係作りから始め、根気よく誘導し、オムツだった入居者がトイレで排泄できることで自信をつけ、表情も明るくなって、家族親族の訪問回数も増えた例がある。トイレに行くために急に立ち上がり転倒の危険のある入居者とは、トイレのサインに手を挙げてもらうようにしたり、夜間職員がトイレに立つ入居者に気づきやすいようにベッドに鈴をつける工夫をしている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	チェック表で排泄状況を把握し、乳製品や食物繊維の多い物を摂っていただいたり、体操や歩行運動を行って体を動かすことで便秘の予防・対応に努めている。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	1対1の個浴でゆっくりと入浴していただいている。季節によってはゆず湯や菖蒲湯、入浴剤を使うなどして入浴を楽しんでいただく工夫をしている。	建物改修の影響で脱衣所・浴室へ階段が2段あり、そこは職員2名で介助し、入浴は着脱とも1人の職員が対応している。手すりが脱衣所、浴室、浴槽に付けられ安心して入浴できる。入居者は週2~3回入浴しているが、毎日の入浴もかなえたいと考えている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活リズムに合わせて臨機応変に対応している。日中の短時間での朝寝や昼寝、室温調整や湯たんぽの使用、照明加減の配慮などで睡眠環境が快適になるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬一覧表を活用したり、臨時薬等の変更を申し送りノートと日報で職員が把握し、一人ひとりの状態に合った服薬支援を行っている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	リビングや廊下の掃除機掛け、洗濯物たたみ・干し、食事の後片付け、食器拭き等のそれぞれの生活歴や力を活かした手伝いをしていたり、体操や歌唱、生け花や手芸等を一人ひとりの出来る範囲で楽しんでいただいている。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	食材やおやつを買出しに職員と共に掛かけたり、中庭に洗濯物干しや気分転換に行っている。また、ドライブや外食等の行事計画を立てて季節を感じていただけるよう配慮している。家族との外出も含め、外出記録をチェックして入居者がまんべんなく出掛けられるようにしている。	年間行事として季節の花や紅葉を楽しむ外出と外食を組み合わせ、全員で車3台に分乗して出かけている。同じ法人の新設された事業所を訪問し交流している。食材の買い出し、併設の小規模多機能施設へお茶飲み、散歩、洗濯物干しなど日常的な外出支援も心掛けている。外出記録をチェックして外出の少ない入居者には積極的に声を掛けて、中庭への散歩や洗濯物干しに誘い戸外に出る機会を作っている。	
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	所持することを制限はしていないが、現在所持を希望する方がいない。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	行っていない。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	快適に生活できるよう、共有部分を清潔にし、室温を調整したり、空気の入替えをしている。季節にあった歌の歌詞、切り絵やカレンダー、生け花や誕生日のポスター等を壁に貼り、季節感を感じられるようにしている。	玄関前に菊鉢が置かれ、中庭には季節の花が咲きハッサクの実が色づいている。グループホーム入口に入居者手作りの花瓶に季節の花が挿してある。居間には季節の歌の歌詞、カレンダーが貼ってあり建物全体で季節感を感じることができる。居間の横にオープンキッチンがあり調理する職員と会話しながら、日中のほとんどを入居者は居間の思い思いの場所で過ごしている。食事のできる匂いも漂い、居間がやや雑然としているのがかえって家庭的な雰囲気になっている。	朝一番の視察に居間に入った時にかすかにトイレ臭を感じた。調理が始まるとその匂いで感じなくなったが、職員の出勤時にチェックしてみたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	出来る限り一人ひとりの居場所や話せる場所づくりができるよう、テーブルやソファの配置に配慮している。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族から在宅時のベッドの位置を確認してから配置するなど、少しでも自室の間取りに近づけ環境を変えないよう配慮している。また、馴染みの物品や日用品、趣味用品を持参していただいている。写真やぬいぐるみを飾ることで安心されている方もいる。	グループホームで用意しているのはエアコンとカーテンで、その他の家具調度品は入居前に使っていた物を持ってきてもらっている。ベッド、寝具、タンス、衣装ケース、写真、ポスター、ぬいぐるみ、テレビなど、入居者の好みの物が置かれ、部屋毎に個性的な住まいになっている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内を整理整頓し、床に物を置かないようにしたり、廊下や窓に手すりを設置するなどして事故防止に努めている。トイレや居室にわかりやすいよう表示を出し、出来る限り自立した生活が送れるよう支援に努めている。		